データ　アラカルト

Q：生活科は、総合的な性格をもつと言いますがどのようなことですか？
A：生活科が創設されたときの理念です。

生活科が創設されたときに、遊びも学習であるということが定義されました。子どもの遊びには、見る、聞く、触る、作る、探す、育てる、話す、考える……といった様々な活動があり、様々な学びがあるのです。それが学校や生活への意欲や工夫を生み出し、実生活に役立つことにつながります。また学年カリキュラムの編成の際、内容の近いものはを集中的に学習すること考えられます。

たとえば、「先生はみんなの生活に役立つゴミを集めてきました」と言って、箱、缶、スチロールトレイをたくさん集め、示します。そして、たくさん集まったらまず、みんなで遊びます。ただし、遊ぶ約束を設けます。はさみやのりを使わないことです。形を変化させないためです。そうすると坂道で缶を転がしたり、積んでお家を作ったりして、工夫して遊び出しますね。

遊んだあとに算数の学習を入れます。形に目を付けて、底面の形を考えさせ、分類させます。牛乳パックや缶、それをワークスペースのたなにきれいに並べるんですね。真四角はピッタリ並べ、丸もきれいに並べる。四角のお部屋、丸のお部屋って決めます。そこに入らない箱もあるわけで、だからこそ、形を意識させることにつながります。そこから底面の形をうつして絵を描くのです。

音楽では、楽器作りに利用します。小石入れシャカシャカ音をたてたり、ゴムをはってギターっぽく作りリズムを楽しみます。そして、生活の時間はおもちゃを作ります。

このように類似性があるものを集めてカリキュラムを考えることで、身の回りにあるものでこんなにたくさん勉強ができるということを考えたり、自然と形を意識するようになったりするわけです。スタートカリキュラムの考え方は、このあたりにあるのではないでしょうか。

また、このように一つの素材で多様な活動を考えること、日常的に触れ続けることで、子どもの中に思いや願いを育てることにもつながると考えます。子どもの中に「作りたい」「遊びたい」という心が育つと考えられのです。

Q：最後にズバリ、「自ら学びの世界を拡げ、よりよい自分を創る子ども」の研究主題が目指すことをお知らせください。
A：今までの自分とは違う自分の可能性に自ら気付くこと

今、子どもたちを取り巻く生活では、環境（もの・人・こと）との直接的な接触を困難にし、直接体験による学びの世界を阻んでいます。それゆえ、子ど

もの生活感覚を揺さぶりながら、環境に意識を向け、環境と能動的にかかわり、環境との応答関係をつくらなければなりません。「自ら学びの世界を拡げ」とは、まず自分とかかわり合う環境世界を拡げる関係作りから始めることになります。つまり、拡げるとは、未知なる環境を身近に引き寄せ、自らの生活に組み込み、生活の中に活かすことなのです。そのことによって思いや願いが、様々な体験活動を通し自己実現することになり、「よりよい自分を創り」「豊かな生活者として創り」あげられてゆくのです。

例えば、水に浮かべて遊ぶという題材がありますね。これは図工でスタートします。牛乳パックやペットボトル、スチロールトレイなどで船を作ります。できあがった頃に「浮かぶかな」と問いかけてみると、子どもは浮かべたいって思いますよね。浮かべるためには、水が必要になります。学校の中で水のあるところは、学校探検や生活の中でもう知っています。しかしその時は「浮かぶ遊び」とは結びついていません。ここで初めて水をどう使うか考えるのです。家庭科室でタライを見付けた子どもも考えるはずなのです。要するに、学校探検は、1年間の生活科を見通す単元だということを、意識しながらやるんです。「ここいったらね、こういうものあるんだよ」と子どもの学習につながりのあるものを見付けさせるように環境を作っておくのです。「先生これ浮かぶかな」と子どもが言ったら、「そしたらさ、あれ、学校探検の時、タライあったでしょう。あれもっておいで」と言います。それをやっていない学校は、先生が準備しますが、学校探検を経験している子どもは、「あっ、アイロンがあったお部屋だね。一人だと持てないから二人でいい？」「もしカギがかかっていたら教頭先生に相談するんだよね」と言って、急いで取りに行きますね。タライを自分で持ってきて、自分で水入れて、浮かべます。でも、船は倒れます。だから次は、倒れない、沈まない船に子どもはチャレンジしていくのです。

みんなが浮かぶようになったら、「じゃあこれで遊びに行こう」と、はじめて子どもに投げかけるのです。子どもは、水の出るところと考えますから、水飲み場って言いますね。そこで教師は「公園とか水のある楽しい遊び場はないの？先生は、ここに住んでいないからわからない」と言うと、必ず「ボク知っている」という子が出てきます。「〇〇川であそべるよ」「えっ、でも先生そんなところいっていいの？」と子どもは自己規制しますね。「じゃ、どうやっていくの？」というと地図を書いてくる子がいます。その子に旗をもたせて、川へ行って遊ぶのです。安全面は必ずチェックしますがね。

子どもは大抵、活動は学校内だけでと考えています。しかし、様々な体験の世界が拡がるかかわりを設けることで、子どもの思考や行動の世界を拡げてあげられるのです。こういったことが、今までの自分とは違う自分の可能性に自ら気付くことにつながるのです。